
釘宮病

悲劇のM

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

釘宮病

【Nコード】

N6363F

【作者名】

悲劇のM

【あらすじ】

僕は、釘宮病に身体を蝕まれていた――

四方を白に囲まれた病室。室内に一つだけの小さな窓からは眩い陽光が差し込んでいる。簡単な点滴台と僕が寝ているベッド以外には何も無いところだった。

二十歳。人生これからという時に、僕は釘宮病を宣告された。一年前のことで、今は二十一歳だ。

人気アニメ声優である釘宮という女性の声を聞きすぎた者に起こる中毒症状である。釘宮ウィルスという特殊な病原体が突如大脳に発生し、その魅力的なツンデレロリ声が無ければ発狂してしまうという恐ろしい病だ。病気の進行が進むに連れ病状は悪化する。そして、最後には死にいたるという病だ。薬物投与をしても、発病して一年以上生きる例は稀だという。僕にはもう、身体を動かすことすら難しい。

何故だ。何故なんだ。何故、未来のある僕なんだ。僕は運命を呪う。ただ、ツンデレが好きただけだ。ただ、妹が好きただけだ。釘宮ボイスは一日十時間までと決めていたのに、何故僕に発病したんだ。

そう自問している時、扉を叩く音がした。

「おじゃまします」

言うが早いか、声の主は扉を開け、ベッドの隅の方に腰を下ろした。

恋人の恵理。付き合って三年目であり、結婚まで考えていた。優しく、医師ですら諦めかけている僕の下へ毎日通い、献身的な看病をしてきている。大人っぽい雰囲気漂わせていて、彼女を見てツンデレやロリという言葉が脳裏に浮かぶことは無い、そんな女性だ。他人に感染することは無い釘宮病だが、感染の危険があっても彼女は毎日ここに来ているだろう。

彼女は、明らかに無理をしていると分かる笑顔を作った。

「どうしたの健一、今日はいつもより顔色悪いけど」

やはり、彼女にも分かっていたようだ。僕の名前を言う声が、いつもより震えていた。

薬物投与をもっと続ければ君ならあと一ヶ月は生きられる。医師にはそう言われていたが、自分の身体のことなんて自分がよくわかる。僕はもう、長くない。

その事実を、恵理には悟られなかった。故に僕は彼女の前では弱音を吐かないよう努めている。けど、隠しても無駄かもしれない。平然を装いながら、僕は目線を彼女に向けずに、ただ天井を見上げて呟いた。

「僕、もうそんなに生きられないって自分で思っただ」

しばらくの沈黙。彼女を覆っていた仮面が崩れる音で、それは破られた。

「何言ってるの、健一はもっと生きるんですよ……。お願いだから、釘宮病なんかに負けないでよ……」

むせび泣く彼女の鳴咽が、小さな病室に響く響く。僕は動かすのが辛い腕を無理やり上げて、彼女の頬を伝う涙を拭った。

「泣くなよ、僕の前では絶対泣かないって自分で決めてただろ」

再び、沈黙が流れた。自分で涙を拭いて、僕に目を合わそうとせずに、虚ろな目を宙に泳がせながら彼女は言った。

「医者が言ってた……。もう、今日が峠かもしれないって」

悲しく、躊躇いがちに彼女は僕の予想していた真実を告げた。あのヤブ医者め、何があと一ヶ月は生きられる、だ。

「知ってたよ、そんなこと」

「じゃあ、健一は死ぬことが恐くないの!？」

彼女が初めて見せる、怒りの表情だった。

「死ぬのは嫌だ。そんなことより、恵理を残して死ぬのはもったいない」

「うっ、健一……」

彼女は僕が寝ているベッドに入り込んだ。僕を抱き寄せ、そして

力強く抱きしめた。

僕の胸元に顔を埋め、そこで泣いた。彼女の涙が胸元を濡らす。吐息が少しあたたかい。

彼女の温もり、優しさ、僕への想い。全てが、ひしひしと伝わってきた。僕が死ねば、彼女のことを忘れるかもしれない。けど彼女には、僕のことをずっと忘れないでほしかった。

突然、体中に激痛が走った。それを叫び声にすることすら、今の僕には難しい。強烈な嗚咽感も同時に来て、重い腕で口元を抑えた。口からベツトリとした感触の液体が、大量に手に付着した。自分の手を確認すると、大量の赤い血がついていた。それを見た瞬間、僕の意識は朦朧となった。

「まってて、今すぐ人呼ぶからね！」

当然のように彼女は驚き、急いでナースコールのボタンに手を伸ばした。が、僕はそれを制止した。

「やめ……ろ」

そう言ったのは、彼女がナースコールのボタンを押した後だった。はつきり言えたかわからないが、彼女には伝わったようだ。

「どうして、どうしてよ！」

「もう僕は死ぬ。恵理の笑顔と声で、安らかに見送ってほしい」

恵理は全てを理解したらしい。一呼吸置いた後に、涙でぐしゃぐしゃの顔で笑った。

「生まれ変わっても、またあたしの彼氏にならないと……許さないんだからね！」

慣れない事を言う彼女に、僕も思わず笑ってしまった。僕に残された最後のエネルギーを使っても、それは恵理には分かりそうもない、小さな笑いだった。

もう二度と開かれることのない瞼を、僕は閉じた。

私は今、声優を目指して声優学校で勉強している。

学校の勉強だけじゃ足りないコトももちろんある。そういう時は、自宅で彼の写真を相手に練習をするのだ。

「あんたのこと、一生忘れてあげないんだからね」

写真の中で笑う彼の笑顔が、いつもより笑っているように見えて
ならなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6363f/>

釘宮病

2010年10月8日15時02分発行